

氏 名	新森 雄大
学 位 の 種 類	博士（美術）
学 位 記 番 号	第 135 号
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論 文 題 目	半外部空間をもつ用途不特定建築物における特性
審 査 委 員	主査 教 授 藤本 英子 教 授 加須屋 明子 教 授 島田 陽 佐々木 一泰（滋賀県立大学 准教授） 南 政宏（香川大学 准教授）

論 文 の 要 旨

論文題目： 「半外部空間をもつ用途不特定建築物の特性」

作品題目： 「islands」（本論第 4 章における制作）

1. 論文の主題

建築はいつの時代も社会そのものを映し出し、その用途は時代の流れとともに変化してきた。しかしながら実際世の中には、建築物を用途によって分類するいわゆるビルディングタイプの範疇に収まらず、使い方の定められていない東屋や公園の休憩所のような建築物も数多く存在する。本研究ではそれらの建築物を「用途不特定建築物」(Use-Unspecified Architecture、以下 UUA)と呼び、既成の類型にとらわれない新たな枠組みを設ける。UUA とその空間的特徴の一つである半外部空間には時代や建築様式を超える普遍性が備わっており、多様な構成形式が試みられている現代建築の潮流の中で、半外部空間をもつ UUA を実際に制作することを通して、その特性の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 論文の構成および概要

2-1. 論文の目次

序章 はじめに

第 1 章 UUA と半外部空間

第1節	研究の背景と目的
第2節	研究の方法と資料
第3節	先行研究との比較
第4節	論文の構成及び概要
第2章	半外部空間をもつUUAの開放性と外部環境
第1節	本章の目的と概要
第2節	半外部空間をもつUUAの開放性
2-2-1	UUAの建築物からみた構成
2-2-2	UUAの半外部空間からみた構成
2-2-3	開放性を軸とした構成類型
2-2-4	開口幅率との比較
第3節	半外部空間をもつUUAの外部環境
2-3-1	UUAの外部環境からみた構成
2-3-2	外部環境を軸とした構成類型
第4節	半外部空間をもつUUAの構成類型とその性格
第5節	小結
第3章	環境認知過程における建築要素の生成
第1節	本章の目的と概要
第2節	作品の分解と要素の書き出し
3-2-1	自作における概要
3-2-2	自作における要素の書き出し
第3節	要素の類型化
3-3-1	「検知」における類型化
3-3-2	「評価」における類型化
3-3-3	「適用」における類型化
3-3-4	連関建築要素の書き出しと類型化
第4節	要素の分析と概念の抽出
第5節	小結
第4章	半外部空間をもつUUAの制作
第1節	本章の目的と概要
第2節	調査と設計
4-2-1	敷地と既存建築物
4-2-2	周辺調査
4-2-3	改修設計

第3節 施工

第4節 小結

第5章 結論

2-2. 各章の概要

本研究は「半外部空間をもつ用途不特定建築物における特性」と題し、以下の5章から構成される。

第1章では、研究の背景と目的、研究の方法と資料、先行研究との比較、論文の構成及び概要について述べた。本章では、筆者がこれまで設計を通じて経験してきた半外部空間の魅力や場としての可能性に触れた上で、「用途不特定建築物」という既成の類型に囚われない新たな枠組みを設けた。また多様な構成形式が試みられている現代建築の潮流の中で、実際に半外部空間をもつUUAを制作することを通して、その特性の一端を明らかにすることを目的とした。そして関連する先行研究や建築論に関する文献を比較、整理することから、本研究の独自性について述べた。

第2章「半外部空間をもつUUAの開放性と外部環境」では、戦後の主要な建築雑誌4誌に掲載された82作品を研究対象とした。まず「半外部空間をもつUUAの開放性」を明らかにするために「建築物からみた構成」として、「数」と「状態」、「屋根を支持する構造部材」、「半外部空間からみた構成」として、その「向き」と「状態」に着目し、構成パターンを導いた。加えて、各作品について「開口幅率」を算出し、各構成パターンにおける「平均開口幅率」を導いた。次に「隣接する外部環境」として、UUAの四方に接する環境要素に着目し、「半外部空間をもつUUAの外部環境」の構成パターンを導いた。さらに構成パターン同士を掛け合わせることから、「半外部空間をもつUUAの開放性と外部環境」のマトリクスを導き、最終的に内部環境要素である「床の高さ」、「床の素材」、「座る設えの有無」、「屋根の透過性」といった滞在性に着目することで、その考察を行なった。

第3章「環境認知過程における建築要素の生成」では、筆者が設計を手がけた『House YMIR』、『Daisen Work Hut』、『Gallery/Salon H』、『ten』、『Earth/Roof』の5つの建築作品について、その場所を取り巻くあらゆる環境からどのように各構成要素の組み立てを行なったのか、「検知」、「評価」、「適用」の3段階の「環境認知過程」に分解し、その要素の書き出しを行なった。次に抽出された要素を、「検知」については「物的要素、空間的要素、自然環境的要素、状況的要素、感覚的要素」の5種、「評価」については「継承、改善、離隔」の3種、「適用」については「使い方、大きさ、形状、構造・構法、空間のつながり、納まり、素材、雰囲気」の8種をファクターに類型化した。そして3段階の「環境認知過程」から直接導き出された建築要素に、それらの連なりや重なりから新たに生み出される建築要素を加え、各作品における「環境認知過程」の図式化を行い、新たに建築を設計する上での鍵語「交感媒体」(Medium for Correspondence)を導いた。

第4章「半外部空間をもつUUAの制作」では、第2章「半外部空間をもつUUAの開放性と外部環境」において導き出したマトリクスによって、構成パターンの位置付けを定め、第3章「環境認

知過程における建築要素の生成」において自作の分析から導き出した鍵語「交感媒体」を踏襲し、兵庫県神戸市に現存する建築物を実際に UUA として改修した。そしてその設計、施工方法について本論との関係を交え解説した。

第 5 章「結論」では、本研究によって得られた結果を整理したうえで、「半外部空間をもつ用途不特定建築物の特性」における総括を行なった。本研究にまつわる今後の活動として、制作した半外部空間をもつ UUA が実際どのように使われているのか分析を行い、現代社会におけるその役割を説いていく予定である。

審査結果の要旨

本研究で新森氏は、建築物を用途によって分類するいわゆるビルディングタイプの範疇に収まらず、使い方の定められていない公園の東屋のような建築物を「用途不特定建築物」UUA (Use-Unspecified Architecture)と名付けた（以下UUAと呼ぶ）。

多様な構成形式が試みられている、現代建築の潮流の中で、半外部空間をもつUUAを実際に制作することを通して、その特性の一端を明らかにした、評価の高い研究である。

・現在社会課題への布石

新森氏が博士課程で研究を始めた後に、本格的なコロナの流行が起こった。まさに氏の研究するUUAは、感染症が広がりやすい閉ざされた空間ではなく、開放的な半外部空間として、社会に求められ、注目される分野になってきたのである。コロナ禍私たちの生活様式は、変化してきた。これまであまり外部での生活に慣れてこなかった日本人にも、カフェ文化の流行も加わり、店の外部に設置されたテラス席などを積極的に利用する生活文化が急速に広がって来た。このような空間が、「UUA」の設定により、認知される空間となり、今後「外向性」と「日常性」の高さといった類似の特性を持った「UUA」が生み出されることも予測できる。この建築物がその考案、設計、施工など、あらゆる段階において参照源となっていくことが期待される。

また、2章で戦後の主要な建築雑誌4誌に掲載された82作品の研究調査分析からも明らかなように、「UUA」とその空間的特徴である半外部空間には、時代や建築様式を超えた普遍性も備わっている。

・建築家としての新森氏の視点から

新森氏は自身が設計者として、これまでも数々の建築設計を手がけてきた。既に建築作品として実作があり、それを踏まえたうえの研究があり制作を行っている。

作品展示では、『House YMIR』、『Daisen Work Hut』、『Gallery/Salon H』、『ten』、『Earth/Roof』の5つと、さらに今回の研究に基づく新たな作品を、スケールモデルとして制作し、現場の写真とともに展示をした。それぞれの現場は各地にあるため同時に確認できないが、周辺の地形や周辺環境を示すモデルによる展示と、実際に活用された素材の提示などにより、映像では得られない氏の建築設計における思考の一部を切り取るような把握ができる展示となっていた。

また、展示は大変迫力あるものとなり、模型制作のエネルギーを研究主題の表現にもっと割いた方が本質的ではなかったかとの意見もあるほど、模型は優れたものとなり見応えがあった。

・UUA 実践での制作評価について

研究を経た検知をもとに最終的に、兵庫県神戸市に現存する建築物を実際に「UUA」として改修し、最終作品としている。

まず、第3章「環境認知過程における建築要素の生成」において自作の分析から導き出した鍵語「交感媒体」を踏襲し、そしてその設計、施工方法について、第2章、第3章との関係を交え論文では解説を行なっている。

制作した「UUA」は単なる自作の延長ではなく、そして単にクライアントワークでもなく、非常に興味深く意義深い実験的なものとなっている。このように自身の思索としての建築実現を成し遂げたことは、極めて高く評価したい。

設計の過程では、地域の形態や生活のふるまいを調査したうえで、さまざまな人へ色々な使われ方を引き出す提案が、実施されている。これは非常に貴重なことであり、また恒久的な空間として氏が維持していく姿勢も貴重である。この社会とつながる活動の場づくりという点でも、作品を高く評価した。

この「UUA」作品は、まだ使われ始めたばかりで検証がこれからであるが、地域での関心が、現在少し見られ始めているという。新たな近隣の関心が高まることで、活かされる空間であり、小学生の活用などは、用途不特定だからこそ可能になるものであるに違いない。今後の活用についての、制作者の働きかけと、地域の中での空間作用の探求と発見、観察を期待したい。

○論文審査所見

あらかじめ用途が決められていない建築を「用途不特定建築物（UUA）」と名付け、その詳細な分析と考察を経て特性を明らかにしようとする研究である。

まず第一章では、研究の背景と目的や論文の構成について述べ、自身の経験から出発しつつ、用途を限定しないUUAと、外と内を繋ぐ半外部空間の重要性を確認し、関連する先行研究や建築論に関する文献を比較、整理することから、本研究の独自性について論じる。

続く第二章「半外部空間をもつUUAの開放性と外部環境」では、戦後の主要な建築雑誌4誌に掲載された半外部空間を持つ様々なタイプのUUA事例を研究対象として詳細な分析を行い、「建築物からみた構成」として、「数」と「状態」、「屋根を支持する構造部材」、「半外部空間からみた構成」として、その「向き」と「状態」に着目し、構成パターンを導いた。加えて、各作品について「開口幅率」を算出し、各構成パターンにおける「平均開口幅率」を導き、「隣接する外部環境」として、UUAの四方に接する環境要素に着目し、「半外部空間をもつUUAの外部環境」の構成パターンを導いた後、これらを掛け合わせることから、「半外部空間をもつUUAの開放性と外部環境」のマトリクスを導き、最終的に内部環境要素である「床の高さ」、「床の素材」、「座る設えの有無」、「屋根の透過性」といった滞在性に着目しつつ、その考察を行なった。

第3章「環境認知過程における建築要素の生成」では、論者が設計を手がけた『House YMIR』、『Daisen Work Hut』、『Gallery/Salon H』、『ten』、『Earth/Roof』の5つの建築作品について、

その場所を取り巻くあらゆる環境からどのように各構成要素の 組み立てを行ったのか、「検知」、「評価」、「適用」の 3 段階の「環境認知過程」に分解しながら要素を書き出し、本要素に、それらの連なりや重なりから新たに生み出される建築要素を加えつつ図式化を行い、新たに建築を設計する上での鍵語「交感媒体」(Medium for Correspondence)を導いた。

第 4 章「半外部空間をもつ UUA の制作」では、第 2 章において導き出したマトリクスによって、構成パタンの位置付けを定め、第 3 章において自作の分析から導き出した鍵語「交感媒体」を踏襲しつつ、兵庫県神戸市に現存する建築物を実際に UUA として改修し、設計、施工方法について論じた。

第 5 章「結論」では、本研究によって得られた結果を整理したうえで、「半外部空間をもつ用途不特定建築物の特性」における総括を行なっている。

本論文の特徴として、既に建築作品として実作があり、それを踏まえたうえの研究があり制作を行っていることが挙げられる。また研究対象として、自身の作品との共通性を持つ、使い方の定められていない半外部空間に着目し、国内外の建築物を対象とした調査分析を行っている。それは実際の設計やデザインを行うものが、研究そして制作に至るモデルとして、ひとつの在り方を示している。

調査研究に関しては戦後の建築雑誌から 82 作品を抽出し、構成パターンや外部環境との関係性を分析しており、そこに外向性と内向性、日常性と非日常性を掛け合わせているのは、非常にユニークであるといえる。

また論者自身の作品分析においては、5 作品を挙げ、前述した研究手法を踏まえながら分析を行っているが、ここでの特徴として、当該作品がこれまで専門誌に掲載されており、さまざまな専門家から評されていること。また、評された内容と本人の意図との関係性が読み解けるのは、非常に貴重な作品論である。また、評された内容と、規定されていない空間が図らずも対応していることは、今後の研究を発展させるにあたり期待できる。

○審査結果

上記を踏まえて、本審査では全員一致で合格とすることとした。